

京都府立大学学術報告(人文)第66号 (2014年12月)

明治時代の英語ガイドブックにおける京都へのまなざし — 「文化財」という観点

野 口 祐 子

はじめに

イギリスでは19世紀の後半から富裕層の世界周遊旅行が盛んになり、日本が海外からの旅行者を受け入れるようになると、日本も周遊の目的地のひとつとなった。イギリスで大衆のための団体旅行をはじめて組織したトマス・クック (Thomas Cook) は、海外へのパック旅行の創始者でもある。トマス・クック自身が1872年に行った世界一周旅行のコースには、当初から日本が組み込まれていた (Hamilton 189-190)。そのような時代の流れの中で、日本国内の人気のある観光地については少なくとも、外国人受け入れ態勢も徐々に整っていき、海外の旅行者が日本旅行を楽しんだ経験をもとにした旅行記が出版された。旅行記は19世紀イギリスにおいて人気のジャンルであった。また、旅行者が増えるにつれ、効率よく日本各地を観光するためのガイドブックも出版されるようになった。欧米人が、鎖国によって長らく神秘であった日本での珍しい体験を綴った旅行記の時代から、広く一般的な海外観光旅行の対象として日本を訪れる時代へと変わっていったのである。

日本が人気の旅行先として選ばれた理由には、幕末の開港以来、日本についての情報が格段に増えたこと、それとともに「おとぎの国 (fairy land)」「美の国」というイメージが広がったことが挙げられる。実際、明治初期の旅行記には「おとぎの国」「美の国」といった表現が頻出する。同時に、だんだん増えていく旅行者の実地体験から、急速な欧化政策によって日本の美と異国情緒が失われていくという認識も広まった。

日本国内が安価で旅行できる、美術工芸品が手に入ることも日本を目的地に選ぶ大きな理由であった。ちょうどヨーロッパと合衆国ではジャポニスムの流行をみた時代である。当時、日本から持ち込まれた浮世絵や、欧米で盛んに開催された万国博覧会に日本から出品された展示品に人々が熱狂し、それらから影響を受けた欧米の絵画や美術工芸品、室内装飾、家具などが高く評価された。

欧米からの旅行者が求めたもの、すなわち失われゆくいにしえの神秘と美が凝縮した都市とみなされたのが、京都であった。明治維新直後は外国人の立ち入りが厳しく制限されていた京都

も、明治時代中期になると、海外からの一般旅行者も訪れることができるようになった。1ヶ月ほどの滞在では、横浜・神戸・長崎といった外国客船が着く港を拠点に、日光・東海道・中山道・関西・九州・北海道といった遠方へと足をのばす旅行者もあったが、旅程の中で京都は人気の滞在地のひとつとして、数日を過ごす旅が選ばれた。サトウ (Ernest Mason Satow) とホーズ (Albert George Sidney Hawes) による『日本旅行案内』(*A Handbook for Travellers in Central & Northern Japan*, 1st edition, 1881) では、船で横浜あるいは長崎から神戸に着いた旅行者は、“No passports are required for Ozaka. Passports for Kiōto are procurable through the consulates (for American citizens from the Ken-cho or prefecture direct), and must be shown when taking railway tickets” (1st edition, 283) とあり、1881年時点で京都を訪れるには、まだ「パスポート」と呼ばれる「内地旅行免状」が必要であった(長谷川 58)。神戸から京都への移動は鉄道で、その際に「パスポート」を提示する必要があったが、旅行記で「パスポート」の取得や鉄道の切符の購入に手間取ったという記述を筆者は把握していない。旅行者の京都訪問の目的のひとつは、陶磁器や金工、漆器、絹製品などの店や職人の作業場を訪れることであった。もう一つの目的は、神社仏閣などを見て回ることで、今日の京都観光コースと大差ない盛りだくさんの名所を回っている。もう一つの特徴は、京都を拠点に一日の遠出を楽しむというもので、特に保津川下りと琵琶湖方面は人気であった。旅行者の多くは、京都とその周辺の神社仏閣だけでなく、自然を觀賞し体験することからも旅の喜びを得ていたのである。

欧米人の手になる日本旅行記の多くには、このように当時の京都を堪能している様子が活写されている。日本を目指す旅行者の多くは、すでに本国で日本の浮世絵や美術工芸品、家具調度などを目にしており、ある程度の知識と大いなる期待をもって京都を訪れた。また彼らはサトウやチェンバレンといった長期日本滞在者によるガイドブックや、数多く出版されていた日本旅行記などに目を通して、京都に着いたら何を見るべきか、何をすべきかを心得ていた(長谷川 62-74)。つまりガイドブックや旅行記は、新参の旅行者のまなざしを規定するのに大きな影響力を持っていたと考えられる。

本稿では、日本に長期滞在したイギリス人によって書かれ、明治時代中期に出版された英語ガイドブックを分析対象にして、彼らのまなざしに内在していた文化財観と彼らの美意識に照らして、当時の京都がどのように映ったかを考察したい。特に注目するのは、二条城と平等院である。

1 イギリス人による旅行記やガイドブックの広がり

先述したように、日本を訪れる旅行者の多くは、日本に関する文献を読んである程度の知識を持って京都を訪れた。文献の多くは英語で書かれている。明治時代には外交官・お雇い外国人・商人として在留する欧米人のうちイギリス人が占める割合が高かった。主に教師として雇用されていたお雇い外国人の欧米人のなかで最も多かったのはイギリス人である。イギリス人の

イザベラ・バード (Isabella Lucy Bird) は 1880 年に出版した『日本奥地紀行』 (*Unbeaten Tracks in Japan*) の序章で、“considerably more than half are English, and Anglo-Saxon influences in science, culture, and political ideas and economy, are paramount in the transformation of the Empire” (Vol. 1, 11) と、日本が欧化政策を取る上でイギリスの影響力の大きさを指摘している。この箇所に関する金坂清則氏の訳注によれば、「明治 11 年末時点で雇用されていたことが確認できるお雇い外国人を数えると 554 名となり、そのうち英国人は 282 名、また教師は 190 名となる」、また『資料御雇外国人』 (小学館、1975) から引用して「「明治初年より同 22 年までのお雇い外国人国籍別人数」2299 名中英国人は 928 名を占める」とある (金坂『日本奥地紀行』第 1 巻「訳注」258)。この数字は日本の近代化にイギリスが果たした役割の大きさを物語る。明治維新後の政情不安の時期を過ぎて、多くのイギリス人が安全に暮らす国となったことも、欧米からの旅行者を引きつけた理由のひとつと考えられる。

英語で書かれたガイドブックや旅行記には広く読者の支持を得たものもある。バードの『日本奥地紀行』はその一つである。典型的な「レディ・トラベラー」のひとり目とされるバードは、1878 年来日、7 ヶ月間滞在して、外国人が足を踏み入れたことのない地域を多く含む東北地方から北海道を広範に旅し、滞在の後半は関西を訪れた。彼女は 1880 年に発表した詳細な日本旅行記の序章を、「すでに日本について詳しい読者はこの序章を飛ばして読んでいただきたい」という言葉で始めている (“To those of my readers who are familiar with Japan I offer an apology for a chapter of elementary facts, and ask them to omit it.” Vol. 1, 1)。ただしバードのこの発言は多分に皮肉であって、実際には日本に関する誤った知識を持っているひとがいかに多いかを指摘した上で、それらの誤りをただす目的も兼ねて序章を書き進めるのである。またバードは京都で日本の美術工芸の粋を目にして、他の旅行者同様、感嘆の声を抑えることができないのだが、その際に、これまで自分が日本の芸術についてあまり書かなかったのは、それを楽しんでいないからではなく、すでに多くの人によって語り尽くされているからだと言う (“If I have not written much about Japanese art, it is not that I do not enjoy it, but because the subject is almost stale.” Vol. 2, 248)。ここから、バードが十分なりサーチをして旅に臨んでいることと、日本の美術工芸に関する言説がすでに多く発表されていることがわかる (野口 65)。その彼女が東京から日光での滞在を経て東北への旅に出る際に携行したものの中には、ブラントン (Brunton) 作成の日本地図、『日本アジア協会紀要』、サトウ編纂の英和辞典があった (Vol. 1, 80; 金坂訳注 298-299)。バードが旅した時期には、まだマレー社の日本ガイドブックはもちろん、その前身となるサトウとホーズの『日本旅行案内』も出版されていないが、バードの日本旅行記 *Unbeaten Tracks in Japan* がマレー社から出版されると、「たちまち四版まで版を重ね」「多くの雑誌・新聞で絶賛され」 (金坂 第 1 巻「改題」368) というほどによく読まれたのである。日本に関する情報がイギリスに広まったことを示す一例である。

明治維新前後に重要な役割を担ったイギリス人外交官ミットフォード (A. B. Mitford, Lord Redesdale) があらわした *Tales of Old Japan* (1871) もよく読まれた。ミットフォードが 1906 年

に世に出した *The Garter Mission to Japan* は、明治天皇にガーター勲章を奉呈するための訪問団の首席随員として日本を再訪した時の旅行記である。1866年の赴任時から40年後の日本の姿を見て、その変化を感慨深く記している。この旅行記の中で、自分自身も日本に詳しいミットフォードは、マレー (Murray) 社が出版したチェンバレンとメイソン編による日本旅行『ハンドブック』を高く評価し、日本語その他の困難を考慮すると、これほど十全な学識と情報が豊富に提供されている本はめったに世に出ない、と述べている (“a book the equal of which in its kind has seldom been written, perhaps never, if the difficulties, linguistic and other, be taken into account [...] so replete is it with learning and information of every kind” 201)。そして、日本に関心のある人必携の書として推奨している。

マレーの『ハンドブック』は英語圏以外でも知られていた。当時はオーストリア・ハンガリー帝国の一部であった現在のチェコ共和国にあたるボヘミアの教育者ヨゼフ・コジェンスキー (Josef Kořenský) は、1893年に友人と世界周遊旅行に出発し、日本には9月29日から5週間滞在している。彼が出版した旅行記 *Žaponsko* (1895年、プラハ刊) では日本に関する詳細な情報が提供されているが、彼が5週間の滞在中にそれだけの内容を実地で見聞することは不可能と考えられる。本文中に、英語やドイツ語のガイドブックや旅行記に言及していることから、それらから得た知識を駆使して日本を体験し、旅行記も書いていると推測される。コジェンスキーによれば、太平洋横断客船が横浜港に入港して、グランド・ホテルに宿を取ると、客に旅行案内が渡されたという。*Žaponsko* は最近、チェコ語から英語に翻訳されたので、英語で引用する。

The Grand Hotel supplies the visitor with a bound booklet, entitled 'Guide Book.' It will be invaluable to anyone not equipped with a more thorough, detailed guide, such as that by Murray. Also in the Far East it has become usual for large hotels to provide a printed railway timetable. The Japanese eagerly adopted this American custom along with other cultural innovations. The guidebook contains a detailed plan of Yokohama and informs the foreigner, not just about the city's monuments, its industrial enterprises, consular offices and banks, but also acquaints him with the nature of the Japanese language. (*In Japan* 27-28)

当時の横浜は海外からの旅行者を受け入れる窓口であった。欧米からの旅行者が利用した横浜のグランド・ホテルでは、英語による横浜の案内書だけでなく、鉄道の時刻表まで配付する配慮がなされていたことがわかる。コジェンスキーがここで言う “Murray” とは、ミットフォードが高く評価したのと同じマレーの『ハンドブック』のことである。イギリスのマレー社は、1836年以来 *Handbook* シリーズとして世界各地の旅行記やガイドブックを精力的に出版していた。日本旅行用『ハンドブック』は1891年に出版された (*In Japan* 27注)。この記述から推測されるのは、イギリス人のチェンバレンとメイソンによる『ハンドブック』がチェコでも知られていたことである。コジェンスキーが英語文献も把握していたことは、ミットフォードの *Tales of Old Japan*

を紹介している (*In Japan* 166) ことからわかる。

このように、日本を訪れる旅行者が増え、旅行記やガイドブックが充実し、日本についての情報を入手するのが容易になっていった。同時に、それらの文献は旅行者の日本体験に指針を与え、旅行者の日本観に影響を与えたと考えられる。

2 京都観光の推奨名所 (1) 二条城

ではガイドブックは旅行者にどのような観光を薦めていたのだろうか。この点に関しては、長谷川の論考に要点が抽出されているので、それを参考に概観しておきたい。

日本ガイドブックの嚆矢とされるのはキーリング (W. E. L. Keeling) 編の *Tourist' Guide to Yokohama, Tokio, Hakone, Fujiyama, Kamakura, Yokoska, Kanozan, Narita, Nikko, Kioto, Osaka, etc.* (1880) である (長谷川 63)。これは全 92 ページのガイドブックで、横浜を中心とした観光が詳しく、関西地方では京都・琵琶湖・大阪だけが挙っている。当時の日本国内の事情を反映した旅行案内である。最初の詳しい日本ガイドブックは、サトウとホーズの編纂で *A Handbook for Travellers in Central & Northern Japan* として、1881 年に横浜のケリー社から出版された。後にマレー社のハンドブック・シリーズの一つとして改訂を重ねた日本ガイドブックの原型とも言うべきものである。紹介する地域はまだ限定されているが、サトウとホーズはマレー社のハンドブック・シリーズに組み込まれることを想定し、シリーズの構成を踏襲してこのハンドブックを編んだ (庄田 下巻「訳者解説」432)。これが第 2 版からはマレー社のハンドブック・シリーズに加えられ、第 3 版から編者がチェンバレンとメイソンに替わったという経緯がある。サトウとホーズのハンドブックでは、京都とその周辺で訪れるべき観光名所を詳しく紹介している。その筆頭に挙げられているのが御所である。その後、市中では西本願寺、知恩院、清水寺、祇園、周辺の名所として修学院離宮、銀閣寺、金閣寺、下鴨、黒谷、御室御所、三十三間堂、稲荷神社、嵐山、保津川下り、比叡山が薦められている (1st edition, 299)。御所の紹介には 4 頁近くが割かれている (301-304)。ところが二条城はこのリストに入っていないばかりか、その後続く各名所の紹介でも、以下のような数行しか書かれていないのである。

The Castle of *Nijō*, at the W. end of Ni-jō-Dōri, was built by Iyeyasu in 1601, to serve as a *pie à terre* on his visits to the capital, on the site of the enlarged residence erected by Nobunaga in 1569 for the Sho-gun Yoshi-aki, the last of the Ashikaga line. It is now occupied as the offices of the prefecture (*Fu-chō*) of Kiōto. The prefect's reception room, though dingy in appearance, is a fine specimen of the feudal architecture of the period. (1st edition, 311)

「京都府庁舎として使用されているので、知事の応接室などは見たところみすぼらしいが、封建

時代の建築様式をよく示している」と紹介されている。実際、1871年以來、二条城二の丸御殿は京都府庁舎として使われていた。1885年に府庁は現在地に移転し、その後二の丸御殿の修理が行われたことが、以下の引用からわかる。この修理前に書かれた1881年出版のガイドブックにおける二条城の評価はかなり低いと言える。1884年の第2版における紹介も同じ文言である。二条城造営の歴史に関わる簡単な説明はあるが、建物内の具体的な解説はない。

ところが二条城の扱いには変化が見られる。1893年出版のマレーの『ハンドブック』第3版では、二条城の紹介に割かれたスペースは1頁半と増えている(295右欄-297左欄)。扱いが変わった理由は、編者が交替したということも考えられるが、本文からは二条城の修復が理由として読み取れる。1893年版では以下のように明治維新以降の二条城の変遷が説明されている。ここでの見出しは *The Nijō Palace (Nijō no Rikyū)* となっている。

On the 6th April, 1868, the present Mikado, just re-invested with his full ancestral rights by the revolution then in progress, here met the Council of State, and in their presence swore to grant a deliberative assembly and to decide all measures by public opinion. After this, the Castle was for some time used as the office of the Kyōto Prefecture, but was taken over in 1883 as one of the Imperial summer palaces. Though as many as possible of the wall paintings, being on paper, were rolled up and put away during the occupation of the palace by the prefecture, much harm was done to painted doors and to precious metal-work by the almost incredible vandalism and neglect which ran riot at that period all over Japan, when to deface antique works of art was considered a sign of civilisation and “progress.” The restoration of the Nijō Palace to something like its former splendour dates from 1885-6, at which time the Imperial crest of the sixteen-petalled chrysanthemum was substituted in most places for that of the Tokugawa Shōguns. (3rd edition, 295-296)

この紹介によれば、二条城が往時の豪華さを幾分取り戻したのは1885-6年の修理によってであり、それ以前の京都府庁として使用されていた時期を含めて杉戸絵や金工細工などはずさんな管理がされていたということである。このガイドブックでは、このような明治維新以前の古美術に対する「信じ難いほどの破壊行為と軽視 (incredible vandalism and neglect)」が文明と進歩の印とみなされている、と解説している。「二条城」の項では、この後、建物の各部屋の内装を詳しく紹介し、狩野派の絵師の名前も挙げて、芸術作品として鑑賞することを薦めている。「金色の美の夢 (a dream of golden beauty)」「小さく繊細なものを好む国には珍しい壮大さと力と豊かさ (grandeur, power, and richness rarely seen in a country whose art, generally speaking, restricts itself to the small and the delicate)」「芸術の勝利 (a triumph of art)」(296)といった賛美の表現が連なっている。マレーの『ハンドブック』では、二条城の文化財としての評価が、修理を経て格段に上がっていると言える。ただしこのガイドブックは、美術界で有名な絵であ

るとして狩野尚信による杉戸絵「濡鷺図」を紹介する際には、“During the reign of prefectural vandalism, this precious work of art was used as a notice-board to paste notifications on!”(296)という皮肉を込めた批判をしている。京都府が二条城を官庁として使用していた時期に、狩野尚信の絵が描かれた杉戸が掲示板として利用されるとは、古美術への敬意を払わない無神経な態度だという批判である。続けて「蘇鉄の間」も同時期に、取り返しのつかないほど、全体の外観が損なわれたと指摘する(“The *Sotetsu no Ma*, or ‘Palmetto Room,’ was entirely and irrecoverably defaced at the same time.” 296)。

御殿内部の傷みが実際には何に起因するのかはともかく、マレーの『ハンドブック』では明治維新以後の取り扱いのずさんさをその原因と見なしている。“vandalism”、“prefectural vandalism”と繰り返すことによって、「芸術作品の価値を理解しない野蛮な行為」であるという指弾を前面に出している。この批判からは、文化財を保護する立場にある行政による管理の行き届きへの怒りが読み取れる。ジャポニスムの流行によって安土桃山から江戸期の美術への造詣も深まった欧米のまなざしによって、明治維新後の日本における文化財の軽視が鋭く指摘されている箇所である。そのまなざしはまた、欧化政策に邁進する日本が、「古き良き日本」を捨て去ろうとすることへの危機感を表してもいる。

興味深いことに、1895年に京都から出された英語ガイドブックにも同様の表現が使われている。明治28年、京都では平安遷都千百年祈念祭と、それにあわせて第4回内国博覧会が開催された。その際に京都市参事会は、欧米人観光客を対象とした英語ガイドブックを発行した(長谷川68)。以下は‘Nijō Rikyū or Palace’の項からの引用である。

Later the Castle was used for the office of the prefectural government. It was greatly damaged by the vandalism that prevailed during the years that immediately followed the Restoration. The prefectural government took away for better preservation many of the paintings and other decorations; but much harm was done to the painted doors, metal-work, and other things that were left behind. For instance, the famous painting by Naonobu, representing a heron sitting on the grinwale[sic] of a boat, was employed as a place for posting notices. In some of the rooms are to be seen places where persons for amusement branded the beautiful posts with the prefectural seals. (134-135)

ここでは、京都府の公印を柱に捺すいたずらという、マレーの『ハンドブック』にはない“vandalism”の例も挙っている。日本人の編集によって京都から発信された京都ガイドブックに、江戸時代の美術品への野蛮行為が糾弾されているところに、明治時代後期における京都の行政を司る人々による欧米人のまなざしへの同化を読み取ることもできよう。

ただし、マレーの『ハンドブック』で高く評価され、推奨されているにもかかわらず、京都を訪れた欧米人による旅行記には、二条城を見学した記述が少ない。許可を得ないと見学できない

という制約があったためとも思われるが、理由はそれだけだろうか。旅行者が求めた京都とは、気楽に「古き良き日本」らしさを楽しめる体験型観光、たとえば人気の高かった都をどりや保津川下り、鴨川畔での食事、陶磁器・工芸品の店や骨董屋めぐりであったことが旅行記からは推察される。実際にはそれらの多くは欧米への輸出品製造や欧米からの観光客をもてなすために明治時代に始まったものであるのだが、このように、観光客が見たい・体験したいものをショーケース的に提示するのが観光にはつきものである。特にガイドブックが広く読まれることによって観光の定型化が進むと、受け入れ側の姿勢はいっそうショーケース的になる。明治時代の旅行者が、このような観光に対してどう反応したのか、この点は今後いっそうの調査が必要である。

3 京都観光の推奨名所（2）平等院

サトウとホーズの『ハンドブック』では主観的なコメントは控えられ、客観的な紹介に徹していたのに対して、チェンバレンとメイソンによるマレーの『ハンドブック』では、上述のような主観的なコメントがしばしば見られるという特徴が明らかになった。マレーの『ハンドブック』では、平等院鳳凰堂も荒廃していると紹介された。1881年刊のサトウとホーズによる『ハンドブック』では、平等院の歴史・文化財について客観的な解説があるのみだが(336)、1893年出版のマレーの『ハンドブック』になると、文化財の保存状態が悪いことが強調されている。

The building beyond the lotus pond is the Hoo-do, or Phoenix Hall, one of the most ancient wooden structures in Japan, perhaps the most original in shape, and formerly one of the most beautiful, though now unfortunately a good deal decayed. [. . .] By criminal neglect this gem of art was left open to every wind of heaven for many years, and what between the ravages of the weather and the ravages of thieves, the place has been reduced to its present state of decay. (3rd edition, 316)

この説明では、「日本で最も古い建築の一つで独特の形状をしており、以前は最も美しい建築の一つであったが」と、鳳凰堂に建築として高い評価を与えると同時に、現状については「今では残念なことに荒廃している」「犯罪的な放置によって、この宝石のような芸術品は自然の力と人間の略奪に任され、荒れ果ててしまったのだ」と難じている。これも二条城の場合と同様、文化財の保護という観点が強く意識された解説である。

1884年におけるフェノロサ・岡倉天心らの「日本美」発見以来、1888年には国として全国の宝物調査が行われるようになる（高木 2006: 79）。神社仏閣などが宗教施設ではなく文化財として認識される過程である。そのようなまなざしの転換が起こる中で、平等院鳳凰堂の意味付けも変わっていった。1893年のシカゴ・コロンブス博覧会に日本は鳳凰堂を模したパビリオンを

建てた(高木 2006: 152)。これは鳳凰堂が日本らしさを代表するものとして選ばれたからであり、「京都という空間が、ある歴史的時間(国風文化)に特化させられる」過程の表れと捉えられている(高木 2008: 5)。このパビリオンは博覧会終了後もその場に保存された、とマレーの『ハンドブック』第4版(1894)は伝える(“A replica of the Phoenix Hall was set up at Chicago by the Japanese Government Commission in 1893, and left there as a permanent memento of Japan's participation in the World's Fair.” 4th edition, 327)。日本政府は鳳凰堂を、日本の建築美を代表するものとして印象づけようとした。また博覧会会期中の使用を目的に建てられたその建物が保存されたことから、実際に博覧会でも日本の美を代表する建築として評価されたわけである。

しかし万国博覧会が開かれた1893年の時点で、平等院の鳳凰堂自体はマレーの『ハンドブック』に嘆かれているような状態にあった。廃仏毀釈の嵐の後、文化財保護の観点から、寺院建築に修理がなされるにはまだ時間がかかったのである。

では京都を訪れる欧米の旅行者にとって、平等院は見逃してはならない名所として認識されていたのだろうか。当時の欧米の旅行者にとって、宇治といえば茶園であった。彼らの旅行記では、宇治は京都から奈良へ向かう途次にある風光明媚な休憩場所として位置づけられている。旅行者の多くは茶園の景観を愛で、宇治川のほとりの美しい茶屋でおいしい食事を満喫し、平等院を訪れることなく、奈良へと向かった。京都と奈良に数多い寺院建築を訪れる旅行者にとって、その途中にある宇治は、郊外の自然と人の手がかかった茶園の景観を楽しむべき場所と見なされていた。宇治橋のたもとの茶屋で休むのだから、平等院へ行きにくいわけではない。しかし、平等院は観光対象にはならなかった。マレーの『ハンドブック』にある記述がどれほどの影響を及ぼしたかは定かではないが、鳳凰堂の荒廃した現状が強調されたために、見逃してはならない場所として認識されなかった可能性はある。この後、鳳凰堂の半解体修理が行われたのは、1902年から1907年にかけてのことである(伊藤 130)。

まとめと今後の課題

2014年、平等院鳳凰堂は大修理が終わり、創建時にも用いられた顔料で丹塗りを施した姿を蘇らせた。外観を平安時代の色と仕様に復元するのが修理の方針であった。文化財のあるべき姿と修理のあり方は今日的な問題でもある。文化財にとってどこまで修復した姿がふさわしいか、「古色の趣」と「荒廃した姿」の境界をどこに引くかは文化によっても個人によっても異なるであろう。マレーの『ハンドブック』の執筆者にとって、平等院の古色蒼然とした姿は荒廃した姿に見えた。歴史上の物語と結びついた二条城や平等院としてではなく、目の前にある建造物として捉えられる時、二条城や平等院は、その時点での姿こそが意味を持つ建築であり文化財となる。文化財の保護・修復を目的とした古社寺保存法が制定されたのは1897年である。欧米人の目には文化財として映った建築や内装などを、日本人が文化財として扱うまなざしを獲得するまでに

は、明治維新後それだけの時間がかかったのだ。

欧米人によって書かれた明治時代の旅行記やガイドブックに扱われた京都の名所は、欧米人のまなざしを受けて、その価値を変貌させていった。それは日本の文化財行政と観光の形にも大きな影響を与えるものであった。そしてそのまなざしは、日本の名所観へも浸透していったと考えられるのである。この点については、今後いっそうの研究を必要とする。

[付記] 本稿は、平成 25 年度～27 年度科学研究費基盤研究 (C) 「明治時代の京都を訪れたイギリス人の京都観とその思想的背景に関する比較文化研究」(課題番号 25511007 研究代表者:野口祐子)の成果の一部として発表するものである。

[参考文献]

- 伊藤延男編「平等院伽藍略年表」渡辺義雄撮影『日本名建築写真選集 3 平等院』新潮社、1992。
- 金坂清則「訳注」「改題」、イザベラ・バード『日本奥地紀行』金坂清則訳注、第 1～第 4 巻、平凡社、2012-2013。
- 京都市参事会編、*The Official Guide-Book to Kyoto and The Allied Prefectures*. 奈良: 明新社, 1895.
- コジェンスキー、ヨゼフ『ジャボンスコーボヘミア人旅行家が見た 1893 年の日本』鈴木文彦訳、朝日文庫、2001。
- サトウ、アーネスト & A. S. G. ホーズ『明治日本旅行案内 下巻 ルート編 (II)』庄田元男訳、平凡社、1996。
- 高木博志『近代天皇制と古都』岩波書店、2006。
- 高木博志「『京都らしさ』と国風文化」丸山宏他編『みやこの近代』思文閣出版、2008。
- 野口祐子「明治時代の京都を訪れたイギリス人の工芸と室内装飾に対する反応とその思想的背景に関する研究」『京都府立大学学術報告 人文』第 65 号 (2013)、63-77。
- バード、イザベラ『日本奥地紀行』金坂清則訳注、第 1～第 4 巻、平凡社、2012-2013。
- 長谷川雅世「英文ガイドブックにみる明治・大正時代の京都の名所—ガイドブックが伝える外国人が旅した京都」野口祐子編『メディアに描かれた京都の様態に関する学際的研究—平成 23 年度京都府立大学地域貢献型特別研究 (ACTR) 研究成果報告書』(2012) 第 5 章、62-86。
- Bird, Isabella Lucy. *Unbeaten Tracks in Japan*. Vol. 1 & 2. 1880. Cambridge: Cambridge UP, 2010. Digitally printed version.
- Chamberlain, Basil Hall. and W. B. Mason. *A Handbook for Travellers in Japan*. 3rd edition. New York: Charles Scribner's Sons; London: John Murray; Yokohama: Kelly. 1893. American Libraries Internet Archive. <https://archive.org/details/ahandbookfortral4firgoog>
- Chamberlain, Basil Hall. and W. B. Mason. *A Handbook for Travellers in Japan Including the Whole Empire from Yezo to Formosa*. 4th edition. New York: Charles Scribner's Sons; London: John

- Murray; Yokohama: Kelly. 1894. American Libraries Internet Archive.
<https://archive.org/details/handbookfortrave00murr>
- Chamberlain, Basil Hall. and W. B. Mason. *A Handbook for Travellers in Japan Including the Whole Empire from Yezo to Formosa*. 5th edition. London: John Murray ; Yokohama: Kelly. 1899. American Libraries Internet Archive. <https://archive.org/details/ahandbookfortra00masogoog>
- Hamilton, Jill. *Thomas Cook: The Holiday-Maker*. Stroud: Sutton Publishing, 2005.
- Keeling, W. E. L. ed. *Tourists' Guide to Yokohama, Tokio, Hakone, Fujiyama, Kamakura, Yokoska, Kanozan, Narita, Nikko, Kioto, Osaka, etc.* Yokohama: A. Farsari, 1880.
http://ocw.mit.edu/ans7870/21f/21f.027/gt_japan_places/tg_01.html
- Kořenský, Josef. *In Japan (1893-1894)*. Trans. Miriam Jelinek. Prague: Charles University in Prague, 2013.
- Mitford, A. B. Lord Redesdale. *The Garter Mission to Japan*. London: Macmillan, 1906. Rpt. BibilioLife.
- Satow, Ernest. and Albert George Sidney Hawes. *A Handbook for Travellers in Central & Northern Japan*. 1st edition. Yokohama: Kelly & Co. 1881. American Libraries Internet Archive.
<https://archive.org/stream/ahandbookfortra00hawegoog#page/n7/mode/2up>

(2014年10月1日受理)

(のぐち ゆうこ 文学部欧米言語文化学科教授)